

日本で出版された中日辞典と わが国で出版された日中辞典との比較

彭 広 陸

〈北京大学〉

はじめに

外国語学習者にとって、二ヶ国語辞典は必要不可欠なものである。例えば、中国語を学ぶ日本人には漢日詞典（日本語で言うと「中国語辞典」あるいは「中日辞典」）が必要であり、日本語を学ぶ中国人には同様に日漢詞典（「日中辞典」）が不可欠で、初学者であればなおさらである。言い換えれば、日本における中国語学習者にとっての中日辞典と、中国における日本語学習者にとっての日中辞典の重要性は同じであると言える。

筆者はこの三十年来、中国と日本で出版された日中辞典・中日辞典の編集や校正作業に幾度となく参加してきた。そのため、中日両国における日中辞典・中日辞典の編纂および出版状況についてある程度の理解があり、また身をもって体験もしている。ここでは日本で出版された中日辞典と中国で出版された日中辞典の比較を行い、両者の差異を明らかにしたい。わが国の日中辞典編纂における問題点を指摘し、日本の中日辞典編纂で手本となる部分を挙げて、今後のわが国の日中辞典およびその他の辞書の編纂事業に多少なりとも裨益するところとなればと期する。

1. 歴史の回顧

1.1 日本で出版された中日辞典

日本で現代中国語を主とした中日辞典が編纂されたのは、20世紀初頭まで遡る。最初に出版されたのは石山福治編纂の『支那語辞彙』（1904）である。1940年代までには日本国内ですでに30余りの中日辞典が出版されたが、なかでも1928年出版の井上翠の『井上支那語辞典』は比較的有名である。1960年代と1990年代には、日本で中日辞典のちょっとした出版ブームが起こった。

1960年に鐘江信光が大学書林から出版した『中国語辞典』は、戦後出版された最初の日中辞典であると言える。1962年、鐘江氏は同じ出版社から『中国語小辞典——中国語－日本語　日本語－中国語』を出版したが、これもまた中日・日中の双方向辞典の起源と言えるであろう。

日本の中日辞典の編纂といえば、著名な漢学者香坂順一氏に触れないわけにはいかない。かつて大東文化大学の教授・学長を務めた香坂氏は、中日辞典の編纂においても大きく貢献した。1961年にはすでに、著名な中国語文法学者である太田辰夫氏と共に『現代中日辞典』を編集し、後に増訂版も出版している。香坂氏編集の『現代中国語辞典』（光生館、第一版1982）は文法が詳しく説明されており、例文を通じた日中同形語の比較や、単漢字に注記された品詞、似た性質をもつ虚詞に対する分析など多くの特徴があり、好評を得ている。その後、初学者と中級レベルの学習者向けに簡約版も出版している。香坂氏は、このあとに述べる大東文化大学編纂の『中国語大辞典』においても重要な役割を果たしている。

1963年に日本の著名な中国語教育専門家、倉石武四郎編集により岩波書店から出版された『岩波中国語辞典』は、大変独創性に富み影響力のある中日辞典である。その特徴は、他でよく見られるような単漢字を大見出しとし、その漢字で構成する合成語を小見出しとして排列する方式を採らず、直接中国語のピンインを記した単語を見出し語としてピンインの順に排列しており、検索に大変便利である。学習者は実際に聞いた発音に基づいて単語

を検索でき、ヒアリングの練習をしている人にとっては大変助けになる。このような非常に前衛的な排列方式を採った辞典は、当時中国国内にもなかった。この辞典のもう一つの大きな特徴は、標準語の発音ではなく、北京方言の発音を採用したという点である。このほか、釈義が正確で、例文が豊富であり、文法の解説も詳細であるなどの特長もあわせ持っている。この辞典は1990年に簡体字版を出版している。

日本の愛知大学中日大辞典編纂所による『中日大辞典』（初版）は1968年に株式会社大安（増訂版以降は大修館書店）から出版されて以来、最も権威ある中日辞典とされており、幾度の改訂を経てきた（増訂版1986、増訂第二版1987、第三版2010）。この辞典の編纂の経過については、辞典のまえがきの中で少し触れてある。編纂作業は1933年に開始され、まず井上翠編集による『井上支那語辞典』を種本として、愛知大学の前身で上海に設立された東亜同文書院（後に東亜同文書院大学と改名）の日中両国の教師が共同で編集したものである。戦時中には一度中断を余儀なくされるなど紆余曲折を経て、1955年愛知大学に専門の編纂グループが立ち上がり、プロジェクトが再稼動した。その後編集者らの十数年に及ぶたゆまぬ努力の末、世に送り出される運びとなった。この辞典は編纂の過程においても中国からさまざまな形で支援を受けている。掲載された語は広範囲にわたり、文語や白話の語彙も取り入れられ高い実用価値がある。この辞典の出版によって愛知大学の知名度は高まったと言えよう。

小学館が1992年に出版した『中日辞典』（第一版）は、小学館と商務印書館が共同で製作したものである。この辞典のまえがきで尚永清氏が書いているように、商務印書館は1960年代に『漢日詞典』を編集しており、その掲載語数は4万語で、日中両国で同時に出版する計画であったが、文化大革命が始まったため頓挫してしまった。1978年日中友好条約締結後、商務印書館は新たに人員を組織して修訂を行った。掲載語は8万語以上にのぼり、例文は6万をくだらない規模にまで拡大した。この辞典が日本で出版される際、小学館は日本の読者が利用しやすいように商務版の原稿に必要な修訂を行い、例文も8万まで増やした。さらに、単漢字と合成語の見出し語を使用

頻度に基づき3つのレベルに分けた。修訂後出版された第二版(2002)はより特徴的で、呂叔湘氏編集による『現代漢語八百詞』(1980年版)の日本語訳本の内容が全て収録されていて、文法の解釈が非常に詳細で正確である。この辞典は第一版からすでに大きな影響力があった。

1994年に角川書店から出版された『中国語大辞典』は大東文化大学が創立60周年の記念プロジェクトとして編纂したもので、香坂順一氏が編集主幹を務めた。この大学の中国語専任教師以外にも、学生や卒業生を編集作業に動員し、中国からの客員教授も多数編集に参加するなど、延べ100人余りが編集に関わった。前後12年の年月を費やしようやく出版する運びとなったこの辞典の特徴は、収録語の多さである。白話の語彙も含め、収録語数は26万語に及び、上下巻のページ数はおよそ4219ページ、これは今まで日本で出版された中で最大規模の中日辞典であり、また積義も正確である。この辞典は、1999年中国において、北京大学出版社より『現代漢日辞海』として出版された。

中日辞典の出版については、日本の著名な出版社である講談社が後に優位を占めるようになる。講談社が1998年に出版した『講談社中日辞典』(小峰王親、長谷川良一、相原茂編)は目立つ特徴を持っており、多くの読者を抱えている。著名な中国語教育専門家である相原茂氏が単独で第二版を編集し大きな修訂を加えたが、その特徴はさらに顕著となり高い名声を得ることとなった。第三版(2010)は内容もさらに充実し(詳細は後述)、さらに付録としてCD-ROMも付いており、新しいタイプの中日辞典の先駆けであると言える。

三省堂が2001年に出版した松岡栄志編『クラウン中日辞典』もまた革新的である。例えば、難しい書き順の漢字は筆順を記したり、それぞれの音節の読み方を中国語のピンインだけでなく日本語のひらがなも併せて注記したりしている。この辞典を基礎として、2008年には三省堂から松岡栄志編による『超級クラウン中日辞典』を出版している。その特徴としては、中級から上級レベルの学習者向けの中日辞典と位置づけ、『現代漢語詞典』『漢英詞典』『応用漢語詞典』などの辞典や2000~2002年の中国語新聞のデータペー

スを参考にしたうえで2万語を追加したことである。その中にはすでに定着した数多くの新語や、政治・経済・医学・IT分野の専門用語などが含まれ、この辞典の活力の源となっている。

白水社が2002年に出版した伊地智善継編『白水社中国語辞典』は学術性が高く、釈義や例文・訳文が正確で上級レベルの学習者に適している。

2004年東方書店から出版された、東方書店と商務印書館の共同編集による『東方中国語辞典』（相原茂・荒川清秀・大川完三郎編）は、日中両国の専門家・学者の協力による賜物であり、延べ200人余りがこの編集作業に参加した。この辞典の特徴としては、形式が斬新で情報量も多く、用例が豊富にあり類義語の分析も非常に実用的であることなどが挙げられる。

初学者向けの中日辞典に関しては、比較的特徴のあるものとして白帝社が出版した上野恵司編の『標準中国語辞典』（第一版1991、第二版1996）と朝日出版社の相原茂編による『はじめての中国語学習辞典』（2002）がある。前者はすべての例文にピンインを振り、重要な語彙には用例を多く用いてあり解説も詳細である。後者は内容が豊富で情報量が多く、視覚的にも楽しめ、さらには日本語の読みから検索することもできる。

上野恵司と相原茂編纂の逆引き中日辞典である『逆引き中国語辞典』（日外アソシエーツ、1993）もまた革新的で、当時は中国国内でもまだ逆引きの中国語辞典は出版されていなかった。

1.2 わが国で出版された日中辞典

ここで考察する歴史の範囲は1949年の新中国成立から現在に至る60年余りの期間のみである。解放後から1966年の文革開始に至るこの期間は、1959年に商務印書館から出版された陳濤氏編の『日漢詞典』が一種あっただけだが、抜きん出て素晴らしいものであった。この辞典の編集者は主に北京對外貿易学院（現對外經濟貿易大学）と北京大学の日本語教師で、編集者の大方が日本へ留学した経験を持っており、彼等の日本語の素養は大変深かったと言える。またその独創的で高品質な特徴によって、出版された後少なくとも二十数年間にわたり他を以って替えがたいものとなった。それはた

とえ、当時日本語教師や日本語通訳の人数が現在と比べるべくもないとはいえ、日本語に関わる人々にとって必要不可欠なものだったのである。またこの辞典は日本でも印刷・出版され、大きな影響を与えた。

1970年代初頭、日中国交回復と日中貿易の拡大にともない、わが国に日本語ブームが到来した。1973年、陳達夫・凌星光編纂による『袖珍日漢詞典』（商務印書館）の出版は時流に乗っており、またたく間に売れていった。この辞典の出版がわが国の日本語の普及に貢献したことは間違いない。また、わが国で初めて単語にアクセント記号を付けた日中辞典でもある。その後、新版（2000）が発売されたが、すでに希少価値は薄れており以前のような影響をもたらすことはなかった。

改革開放以降、中国の日本語学習者の急速な増加にともない、日中辞典の編纂・出版も大きく様変わりした。1979年に遼寧人民出版社から出版された大連外国語学院編の『新日漢詞典』は、“新しい”という点で読者の好評を得、内容にいささか古臭さを感じる商務版の『日漢詞典』に取って代わった。しかし、編集者が地方在住であるためか積義に東北方言が使われている部分があり、玉に瑕であると言えよう。

1983年に北京出版社より出版された北京外国語学校編の『詳解日漢詞典』は、収録語数が適量で積義も正確であるなどの特徴を持つ。かつては相当な販売数を誇っており日本でも出版されている。

1987年に商務印書館と日本の著名な出版社である小学館とが共同で出版した宋文軍編の『現代日漢大詞典』は、収録語数が最も多く、質も高いことなどから日中辞典の権威と呼ばれる地位を確立し現在に至っている。その後多くの日中辞典が世に出てきたが、全国的に影響を与えるものは数えるほどしかなく、ほとんどが特筆すべきものではない。

機械工業出版社が1991年に出版した陳涛編による『日漢大詞典』は、商務版の『日漢詞典』の代替品として発売されたものであるが、商務版の『現代日漢大詞典』に機先を制され、市場に大きな衝撃を与えるまでには至らなかった。尹学義・顧明耀編で、2002年に北京出版社から出版された『新日漢大辞典』は20年近くの年月を費やされたもので、スピード検索と総合性

という二つの大きな特徴があるが、人々を完全に満足させるまでの影響力はなかったと思われる。

日中・中日双方向辞典については、1991年外語言教学与研究出版社から出版された王萍らによる編集の『現代日漢漢日詞典』がこの分野の空白を埋め、ロングセラーとなった。商務印書館が1994年に出版した姜晚成・王郁良編の『精選日漢漢日詞典』（新版2000）は小型サイズが特徴であり、レベルの高い内容で発売以来大変よく売れている。1996年に高等教育出版社から出された顧明耀らの編集による『精選日漢学習辞典』は、学習者という要素をはっきりと意識した初めての日中辞典であると言えよう。

1.3 全体的な印象

ここまでの大まかな考察と比較を通して得られた全体的な印象は、以下の通りである。中国において出版された日中辞典の種類は、日本で出版された中日辞典よりかなり多いが、後者はより質を重視しており、それぞれの辞典が既存の辞典との違いを明確に打ち出しているため、ブランド効果を生み出している場合が多い。中国国内での日中辞典の出版状況は、表面上は全体的に賑わっているように見えるが、実際には大変混乱している。書店におかれた「数多くの素晴らしい」日中辞典はどれも似たりよったりで、独自の特徴を持っているものは珍しく、数合わせ程度に並べられているものが多い。このような状況があるのは、出版社が原因でもあり、編集者自身が原因でもある。

2. 出版社の比較

日本で中国語学習者が増加するのにもない、1990年代から再び中日辞典の出版ブームが起こった。しかし中日辞典を出版する会社は限られており、一部の大手出版社、例えば講談社・小学館・角川書店・三省堂・大修館書店以外は、中国語書籍や教科書を専門に出版することで名の知れたいくつかの出版社、東方書店・白帝社・光生館・白水社・朝日出版社などに限られ

る。日本の出版社は一般的にブランド効果を重視し、通常辞典の企画段階から出版社が積極的に参加して製作者に対し必要な協力をする。大きな出版社になると、編集作業や製作者との調整作業に当たらせるために、特に経験豊富な編集者を専門に用意する。素晴らしい書籍を出版するためには、編集上の時間や労力は惜しまないのである。それだけでなく、辞典を出版した後も宣伝を怠らず、広告効果を大変重視している。

中国国内の出版社はより経済効率に重きを置いているようで、一部の出版社ではそもそも辞書を出版できる条件を兼ね備えていなかったり、日本語の編集能力がないにもかかわらず、日中辞典を出版している。我々のとった統計によると、建国から現在に至るまでの間に、中国では25の出版社から61冊の日中辞典（専門用語辞典と日中・中日双方向辞典は除く）が出版されている。しかし、長い間廃れることなく、日本語界やその他多くの読者から認められたものはごく少数しかない。新たな日本語ブームの到来にともない、日本語辞典の編纂と出版はさらに利益追求型になり、成り行きまかせで計画性に乏しく、出版市場は無秩序さが目立つ。例えば編集者は自分の編集し終わった原稿を出版社に渡すだけで、出版社は初めから全く計画に参加することもなく、両者の間に必要な意思疎通は行われないうケースもある。そのため往々にして編集者はマーケットの情報に疎く、ターゲットが的確なはっきりとした特徴を持つ商品にならないため、結局マーケットを占有するに至らないのである。辞典の出版後も広告宣伝が行き渡らず、ブランド効果を生み出せていない。

近年、ある現象が目撃されている。中国国内の出版社が、日本で好評を得た国語辞典を、もちろん許可を得た上でだが、そのまま印刷・出版するだけでなく、日本で出版された国語辞典（大型や中型を含む）を翻訳し、さらに編集を加えたものを次々に出版しているのである（双方向辞典に作られているものもある）。このように他所のものを取り入れてそのまま使うという手法は、短期で行えるうえに効果の出るのが早く、手間は半分ですみ効果は倍であるといえるだろう。しかしこのような日本人向けに編集された国語辞典が、中国の日本語学習者にとって適しているとは言えない。たとえ翻訳者や

編集者らが必要な文字加工や編集を行ったとしても、この種の辞典の、いかに対象者に焦点を合わせるかという点において存在する前提条件での不足を補うことは容易ではない。こういった現象から、出版者の以下のような心理をうかがい知ることができる。力を尽くして特色ある計画を立てようとは望んでおらず、時間をかけて丁寧によいものを作り上げようなども更々思わない。良品を作るという意識が低く、ただ早く商品を売り出して市場を占有することのみを考えているのである。

もう一点、明らかな相違点を挙げると、日本で出版される中日辞典（大型のものを除く）は修訂期間が比較的短いものが多く、だいたい10年前後で、短いものと4、5年で行われる。しかし中国国内の出版社は一般に修訂作業を重視しないことが多く、ある日中辞典などは出版以降一度も修訂作業を行っていない。一度苦勞しておけば後は楽だと言わんばかりに、修訂をしたとしてもその周期は20年前後かもっと長く（『精選日漢漢日詞典』は例外だと言えるが）、そういった辞典の活力は徐々に失われていく。このようなことも、ブランドが成立しにくい直接的な原因だといえる。この情報化時代において、修訂作業の重要性はますます高まってきている。多くの新語が絶え間なく生み出されており、すでに広範囲で使用が認められる新語については時を移さず取り入れるべきである。そうすることで社会の変化と時代の発展に適応でき、辞典はその旺盛な生命力を保持し、実用価値を高めることができるのである。この点について、中国国内の出版社は今すぐ改める必要があり、もちろん編集者もその責任は他人に押し付けられるものではない。

3. 編集者の比較

日本で出版される中日辞典の編集者は一般的に学界において、または社会的に知名度の高い専門家や学者であることが多く、編集者自身が中国語学の専門家であることも多い。これは商品のブランド化や良品を生み出すために決定的な影響がある。このほか、日本で出版される中日辞典は編集の過程において、多くが中国の関係者から支援や協力を得ており、また多くの中

国の専門家や学者、在日の中国国籍の専門家などが直接編集や校正作業に参加している。辞書の品質を保つのにこれ以上の方法はないだろう。大学の名でもって編纂を行う場合、学校はただ名前を掲げるだけではなく、大量の辞書や参考書を購入する費用を捻出し、専門の人員を揃え、場所を提供するなど、できる限り編集作業に適した条件を提供せねばならない。必要であれば、中国から専門家を教授として招聘し、専属で中日辞典の編集に当らせることもある。北京外国語大学の閻崇琚教授が『中国語大辞典』の編集の際に、また西安交通大学の顧明耀教授らが『中日大辞典』（第三版）の編集の際に重要な役割を果たした例があるが、中国国内でこれを行うことは容易ではない。

比べて、中国国内で出版された多くの日中辞典は、編集主幹が日本語界における著名な学者ではないばかりか、さらには主な編集者（の一人）がそもそも日本語の専門家ではなかったり、大学院生であったりすることもある。このような辞典がブランド化できるはずもなく、品質も保証できないことが多い。この点において、出版社はその責任を逃れることはできない。社会的責任感に乏しい製作者が少なくなく、一意専心で一事に励むという精神を持たず、粗製乱造し出来あがった辞典にはひとつも新鮮味がなく、まるでゴミ同然である。日本の専門家や学者らと協力して編纂した日中辞典などは極めて少なく、自分勝手に作られたものであるというきらいを免れない。

ついでに触れておくと、著名な日本語専門家であった湖南大学の故周炎輝教授は、かつて1990年代の初期に『日漢辞海』の編集主幹として重要な役割を担ったが、当時中国国内の日本語界において主要な教師らが多数この事業に参加し、編集者は延べ100人余りに達した。これは当時の日本語界における盛事であったが、さまざまな理由により頓挫して莫大な損失を生むことになり、大変残念でまた考えさせられる出来事でもあった。

4. 内容の比較

日本で出版される中日辞典はある普遍的な特徴を持っていると言える。そ

それは“独創的である”ということだ。多くがそれぞれの特色を持ち、独創性に富み、できる限り使用者（読者）の立場から利便性を考え編集を行い、実用的であるよう最大限の注意を払う。中国国内で出版される日中辞典はそうではなく、使用者の視点はほとんど見られず、多くは日本で出版された国語辞典の釈義を中国語に改め、例文の後ろに中国語訳を書き加えただけである。これ以外に、形式上あるいは内容に創造性のある辞典は決して多くない。以下に、いくつかの側面から具体的に考察を行った。

(1) 日本で出版される中日辞典は一般的に中国語分野での変化に比較的敏感で、毎回修訂のたびにできる限りの新語を収録しようと努めている。しかも、中国国内における最新の研究結果についても積極的に取り入れて参考にする。例えば『講談社中日辞典』は、第二版より中国語語義の派生過程がわかる派生ツリーを付け加えたが、これは李行健編で語文出版社から出版された『現代漢語規範字典』（第一版1998）の成果をそのまま参考にしたものである。しかしながら中国国内で出版される日中辞典はこういったことが十分に行われていない。例えば日本の国語辞典が根拠とする文法体系は日本の学校文法であるが、この文法体系には明らかな欠点が存在する。そのため日本での外国人向け日本語教育においては、すでに新しい文法体系が広く採用されている。しかし中国の日中辞典は基本的にすべて日本の国語辞典の翻訳版であるため、日本の学校文法をずっと踏襲し続けているのである。このため市場で販売されている日中辞典と現場の日本語教育との間に大きな矛盾が生じている。未だにわが国の専門家や学者が新しい文法体系を採用した日中辞典を一冊も出版できていないという事実は、残念であると言わざるを得ない。

(2) 日本で出版された中日辞典は一般的に視覚効果を非常に重視している。紙面設計にこだわり、今では2色刷りがかなり普及していて、ほとんどが上質紙を使用している。中国国内で出版された日中辞典で2色刷りのものは大変少なく、紙面設計にもこだわりがなく、紙質もあまり良くない。

(3) 既述のとおり、検索を簡便にするため、『岩波中国語辞典』は語の排列を大胆に変更した。またある中日辞典では巻末に付録で日中小辞典を付け

加え、その対訳の中国語にはすべてピンインを付してある。このようにすれば日本の読者は日本語で検索を行うのに便利で、ある程度の中日中双方向辞典の機能をもあわせ持つことになる。わが国で出版される日中辞典にも、新しい語の排列や検索方法を採用しているものもある。例えば『新日漢大辞典』の語の排列方式は、ひらがなで書かれた語は50音順に、漢字で書かれた語はピンイン順に排列してある。こうすることの利点は、読者が該当漢字の日本語の読みがわからない場合でも簡単に検索できるという点である。

(4) 日本で出版された国語辞典にはアクセント記号が付けられていないものがあるが、日本語学習者にとってアクセント記号は非常に重要であり、それが付いていないとその語の発音を正確に把握するすべがない。そのためわが国で出版される日中辞典の多くはどれもアクセント記号が付けられているが、組版の便を図るため、アクセント記号の表記は一般的にどれも数字式(例えば①②③など)をとっており、一見してわかるものになっていない。

(5) 一般的に、日本で出版される中日辞典には単漢字と単語に品詞が記されているが、それはその語の品詞を知らなければ用法もわからないからである。しかしながら中国国内で出版された『現代漢語詞典』(商務印書館)は、第五版(2005)からやっと品詞表記が始まった。比較的早くから語に品詞を表記していた『新編漢語多功能詞典』(国際文化出版公司、1989)でさえ、日本の中日辞典に比べると20~30年遅い。中国国内で出版された同種の辞典に参考になるものがなかった状況のもと、これをやり遂げたことは本当に得がたく素晴らしいことで、編集者が読者の利便性を図るため、いかに精力を傾けたかということはこの点を見るだけでも明らかである。一方、日本で出版された国語辞典には、動詞に自動詞・他動詞という分類表記をしていないものも見られるが、これはわが国の日本語学習者にとっては大変不便なことである。そのためわが国で出版される日中辞典には一般的にどれも自動詞・他動詞の分類表記がされている。

(6) 日本で出版された中日辞典のなかには、すべての例文にピンインが振られているものがあり、読者が読み方を知るのに便利であるが、わが国で出版された日中辞典は漢字に読み仮名をつけているものもあるが、広くは行わ

れておらず十分とは言えない。

(7) 日本で出版された中日辞典のなかには、語の使用頻度によってその語の重要度が示されている（重要語）ものもあり、またそれを3つのレベルに分けてあるものもあって学習者にとっては大変助けとなる。わが国の日中辞典にはこの種の情報はほとんど見られない。

(8) 中日辞典は一般的に語の用法についての説明があり、さらには類義語の分析や日中同形語の分析などもある。当然編集作業は一日にして成るものではないが、こうした内容は大変実用的である。しかし、わが国の日中辞典にこういった内容を見つけることは容易ではない。

(9) 中日辞典のなかには、見出し語以外の内容を大変重視しているものもある。例えば『講談社中日辞典』（第三版）のコラムなどは大変特徴的で、4つの部分から構成されている。①“文化の森”中国文化に関する50項目、②“文字と発音”、③“明解文法”、④“類義語”417組の類義語の分析、である。中国で出版された日中辞典の中からはこの内容に相当するものは見つけ出せなかった。中国国内の日中辞典の編集者は読者のためにあれこれ考えることをほとんどせず、このように精力を尽くすこともしないようである。

(10) 多くの中日辞典は挿絵や写真を使用しているが、これは読者が語義や中国文化を理解するうえで助けとなることを評価すべきである。しかし中国の日中辞典にはほとんど挿絵や写真が見当たらない。その理由はおそらく出版社ができるだけコストを削減し、余計なことは避けたいと思っているからであろう。

(11) 付録が充実していることも、日本で出版された中日辞典の大きな特徴であると言える。例えば『講談社中日辞典』（第三版）の付録は以下のとおりである。

付録1

固有名詞小辞典

作品名／ブランド名／人名／国名・地名

付録2

中国歴代国号

行政区分

少数民族一覧表

度量衡一覧表

親族関係一覧表

このように豊富な付録は、この辞典に高い付加価値をつけることになる。このほか、この辞典の初めのページには中国全図があり、そこには主要な鉄道幹線（起点と終点の名称）や中国の世界遺産一覧表を載せるなど、さらに実用性の高いものとなっている。中国の日中辞典の付録はその多くが日本の国語辞典の付録そのままの内容で、中国人学習者に焦点をあてた内容は少なく、日本の中日辞典と比べるとお粗末である。

むすび

ここまでの考察でわかるように、中国の出版社や編集者は日中辞典の編集においてある程度役立つ仕事をしてはいるが、日本の中日辞典の編纂や出版に比べると明らかなひらきがある。このことを出版社や編集者は冷静に認識すべきである。熟慮なく行動に移す、努力を惜しむ、創意工夫に欠ける、楽をして稼ごうとする、社会的責任感に乏しい、良い商品を生み出そうという意識が低い、コストや利益ばかりを考える。こういったことが問題の根源であると言えよう。もちろん、このような問題は社会全体の環境と無関係ではない。筆者を含む日本語教育や研究に従事する人々および出版社もこの点を深く反省すべきであり、その上で追いつけ追い越せの精神を掲げ、特色があって実用的で、高品質・ハイレベルの日中辞典を世に送り出すために精力を注がねばならない。

付記：本稿は執筆の過程において、日本語界の大先輩である西安交通大学の顧明耀教授の細やかなご指導、及び北京大学の日本語言語学博士課程の学生、汪然と畢曉燕の協力を得た。日本語への翻訳は村司香子さんにお世話になった。ここに感謝の意を表する。